

# 意味変化——フランス語のいくつかの副詞の場合

## Changement sémantique : le cas de quelques adverbes français

鳥居 正文

Masafumi TORII

### 1. 認知的モダリティを表す若干の副詞の意味変化

認知的モダリティを表す副詞、その中でも特に譲歩の文脈でも用いられるようになっている副詞をいくつか取り上げて、その意味変化にみられる特徴を調べることにする。

なお、副詞の譲歩の用法とは、たとえば次の例の *certes* にみられるようなものである。

*Certes je reconnais qu'elle a grand air..., mais enfin je ne la trouve pas tellement inouïe que tu disais.* (Morel (1996), p. 19, concession argumentative より)

公式化すれば次のようになろう： *certes P, mais Q* (P, Q は節を表す。 *mais* の代わりに *néanmoins*, *et cependant* などみられる)

### 2. 具体的分析

#### 2.1. *certes*

*certes* は lat. vulg. \**certas* (accusatif féminin pluriel de *certus*) を語源とし、古仏語で副詞として用いられるようになったものと考えられている。<sup>1)</sup> 語末の *s* は副詞の *s* (古仏語では *s* で終わる副詞が数多くあり、類推で *s* がつくこともあった) として再解釈されたものであろう。

*certes* の初出は 1050 年頃の *La Vie de Saint Alexis* (éd. Storey, 1968) で、合計 7 回現れている。7 回のうち 3 回は *a certes* の形で (すべて地の部分で)、残りの 4 回は *certes* 単独で (すべて会話の部分で)、いずれの場合も "certainement" の意味で用いられている。例文 (1) ~ (6) については参考までに註で日本語訳をつけておく。<sup>2)</sup>

#### a certes の例 (1 例のみ掲げる)

(1) Dunc an eisit danz Alexis *a certes*. (v. 83)

本稿では *a certes* についてはこれ以上取り上げることはしない。

#### 単独 の例 (4 例とも前後の文脈とともに掲げる)

(2) Revint li costre a l' imagine el muster.

' Certes ' dist il, ' ne sai cui antercier '.

Respont l' imagine ; ' Ço' st cil qui tres l' us set, ... (v. 176-8)

(3) Quant il ço veit quel volent onurer :

' Certes ' dist il, ' n' i ai mais ad ester,

D' icest' honur nem revoil ancumbret ' . (v. 186-8)

(4) ' Mult lungament ai a lui conversét ;

De nule cose, certes, nel sai blasmer,

E ço m' est avis que ço est l' ume Deu ' . (v. 341-3)

(5) Ad une voiz crient la gent menude :

' De cest aveir, certes, nus n' avum cure. (v. 531-2)

certes は基本的には、中世を通じて、これらの例に見られる用法の副詞として、すなわち発話内容の断定を強める副詞として機能している。次の例(6)のように話し相手の発話を受けて用いられているようにみえる場合も、中世のテキストでは、あくまでも話し手自身の発話内容を強調していることに注意する必要がある。また、後述するような現代フランス語にみられる certes の単独用法は、中世フランス語には存在しない (Rodriguez-Somolinos (1995). 次例も同書 p.57 からの引用)。

(6) - Est ce tote la fins? fait Aucassins.

- Si m' ait Dix, fait li peres, oïl.

- Certes, fait Aucassins, je sui molt dolans quant hom de vostre eage ment. (*Aucassin* X, 57)

certes は話し相手(父親)の発話を肯定しているわけではなく、あくまでも話し手自身(オーカッサン)の発話、すなわち後続の節 je sui molt dolans... の断定内容を強めている。

近代フランス語に入ってから、断定を強める用法と並行して、<sup>3)</sup>話し手のであれ話し相手のであれ、前の発話の内容を節Pで一応は受けて(=留保つきで受けて)、そのあとの節Qで本当に言いたいことを述べる、いわゆる譲歩の用法が出てくる。したがって、話し手は certes を含む節に対しては、むしろ疑念をもっている場合も出てくる。今ではこれがふつうの用法で、断定を強調する前者の用法、たとえば Oui, certes. (*Certes*, oui.) や Non, certes. (*Certes*, non.) といった表現は文語的あるいはやや気取った言い方である。

上でも触れたように、現代フランス語では

(7) - C'est un film intéressant.

- Certes.

といったように certes を単独で使う用法があるが、この場合も単なる断定ではなく、疑念の含みをもたせた言い方になっている (Rodriguez-Somolinos (1995), p.55)。

このように *certes* は、中世フランス語の断定の強調から近代フランス語に入って譲歩の用法に移行し、現在ではふつうは譲歩の用法でしか用いられないといつてよい。

## 2.2. *bien sûr*

*bien sûr* は形容詞 *sûr* に副詞 *bien* がついてできた副詞句である。副詞句としてのこの形が初めて『アカデミー辞典』に登場するのは 1878 年（第 7 版）であるが、<sup>4)</sup> TLF (*Trésor de la Langue Française*) によると初出は 1782 年 (Laclos, *Les Liaisons dangereuses*) である。Discotext 1 (1827 年から 1923 年までの 300 の文学作品を電子データベース化したもの) で調べてみると、形容詞としての用法ではなく、副詞として用いられている *bien sûr* の例は、1850 年頃まではごく少数であるが、それでも 10 回程度出てくる。世紀の半ばを過ぎると頻出するようになる。(8) はごく初期の例の一つである。

(8) Vous comprendrez cela, *bien sûr*, malgré l'obscurité et l'embarras de ma parole; car... (Guérin, M. de, *Correspondance* (1), 1839)

ひとたび副詞として認められるようになれば、(9) のような応答副詞といつてもよい例が出てくるのにそれほど時間はかからない。

(9) - ...Enfin, une fois mariée, elle s'apprivoisera.  
- *Bien sûr*, ajouta la grosse femme, la fortune de mon mari a été pour moi un dédommagement...(Duranty, L., *Le malheur d'Henriette Gérard* (2), 1860)

このように *bien sûr* は、話し手あるいは話し相手によってすでに述べられた発話や、話し手がこれから述べる発話の内容を、当然のこととして確認するとき用いられる副詞である。

次に、同じ Discotext 1 で *bien sûr* が譲歩を表す文脈で用いられている例を探したところ、1870 年代から現れてくる。

(10) *Bien sûr*, il disait ces choses en manière de rigolade, *mais* Gervaise n'en devenait pas moins toute verte... (Zola, E., *L'Assommoir*, 1877)

ただし、譲歩の例は *bien sûr* の数多くある用例のなかではごく少数である。

以上の分析から、*bien sûr* は 18 世紀の後半に現れ始め、19 世紀を通じて広まった副詞句で、19 世紀の後半には、頻度は低い譲歩を表す文脈でも用いられるようになったとすることができよう。

## 2.3. *évidemment*

*évidemment* は 13 世紀に *evident* から作られた副詞である。*evident* は同じ世紀にラテン語 *evidens* からフランス語に借用されていた形容詞である。*evidens* は *videre* "voir" の派生語であり、フランス語の形容詞 *evident* にも、また副詞 *évidemment* にも、時代を選れば選るほど "voir" の意味が強く含まれている。Huguet の『16 世紀フランス語辞典』には "nettement, clairement, distinctement" の語釈とともに次の例が

挙がっている。

(11) Dion...estoit ja si pres que lon le pouvoit voir *evidemment* de la ville. (Amyot, *Dion*)

このように「(感覚とくに視覚の次元で) はっきりと、明らかに」が *evidemment* の本来の意味である。この本来の意味から、より抽象化された意味「(知性の次元で) 明らかな仕方で、明らかに」が派生する (Descartes などにすでにみられる)。その後、両方の意味で使われ続けるが、次の例では両方の意味が混じっていると考えられる。

(12) Voici comment je raisonnai, et cela très rapidement : ces anglaises, -- car ce sont *evidemment* des anglaises, elles parlent anglais et elles sont blondes, -- ces anglaises, selon toute apparence, sont des visiteurs qui... (Hugo, V., *Le Rhin : lettres à un ami* (2), 1842)

さらに進んで、文頭遊離の文副詞として *evidemment* が用いられている例が 1840 年頃からみつかるようになり、意味も本来の感覚的な面はいつそう薄れ、"certainement, bien entendu" とほぼ同義で用いられるようになる。

(13) *Evidemment*, l'égoïsme tourne à sa propre défaite; il se détruit par lui-même. (Leroux, P., *De l'Humanité, de son principe et de son avenir...*, 1840)

さらには、応答副詞として単独でも用いられるようになる。Discotext 1 では次の 2 例が初出である。

(14) Clara : Et tu le lui as dit?

Aristide : *Evidemment*. (Dumas, A. *Le Fils naturel*, 1858)

(15) La Marquise : ... ; mais ce n'est pas la même chose.

Le Marquis : *Evidemment*. (ibid.)

これらの例では話し相手の発話が肯定文であれ否定文であれ、そのまま発話内容を肯定している。このように、応答副詞としての *evidemment* の用法は 19 世紀の中頃から出てきたと考えられるが、しばらくすると *evidemment* P, mais Q の形の譲歩の例もかなりの頻度で出てくるようになる。

(16) *Evidemment* cela vaud mieux, beaucoup mieux que l'inverse, *mais* cela implique aussi un discernement par trop confus et imparfait de la hiérarchie spirituelle des individus. (Amiel, H.-F., *Journal intime de l'année 1866* (3), 1866)

### 3. 認知的モダリティを表す副詞の意味変化の一般的傾向と *certes, bien sûr, évidemment* の場合

副詞は動詞、形容詞、副詞などにかかっていく構成素副詞 (例 : vite 「急いで」、heureusement 「幸せに」) と文 (節) 全体にかかっていく文副詞に分けられる。文副詞には大きく分けて 3 つの種類がある。

1) 発話内容に対する話し手の判断や評価を表すもの (例 : certainement 「確かに」、heureusement 「幸いなことに」)、2) 発話行為そのものについて話し手が言及するもの (例 : franchement 「率直に言つて」)、3) 発話と発話を連結しテキスト (談話) の流れを作り出すもの (例 : donc 「したがって」、

d'ailleurs「そのうえ」), である。1) のうち話し手の判断を示すものを認識的モダリティの副詞といい、たとえば *certainement* がその一つである。また話し手の評価を示すものを評価的モダリティの副詞といい、たとえば *heureusement* がその一つである。狭い意味で文副詞というときは、これらを指す。

副詞の歴史をみると、大きな流れとして構成素副詞から文副詞に、また文副詞のなかでは、1) のモダリティを表す副詞から3) の連結詞的な副詞に移っていくことが知られているが (Combettes, B. (1995) 参照)、上でみた3つの副詞の場合はどうか。

*certes* は断定の強めから、譲歩の用法へと移行してきている。この副詞は出発点から認識的モダリティを表す文副詞として働いており、譲歩の用法を得た時点から文(節)と文(節)をつなぐ連結詞的な文副詞として機能するようになったと言えよう。今では、単独でもふつうは後者のニュアンスを伴って用いられるまでになっていることは上でも述べたとおりである。

*bien sûr* はもちろん *bien* と *sûr* からできている副詞句であるが、*être bien sûr* から省略的に出てきたことは『アカデミー辞典』(第7版)の記述などから窺い知ることができる(註4参照)。したがって、これも出発点から認識的モダリティを表す表現であることは明らかである。19世紀後半には、譲歩の文脈でも使われている例がみられるようになるが、頻度は低く、ふつうは譲歩のニュアンスは伴わない。その点で *certes* とは異なっている。なお、*bien* は *entendu* や次の *évidemment* などにもついて、譲歩を表す手助けをしているが、*bien* の複雑な働きについて本稿で触れる余裕はない。

*évidemment* は構成素副詞から出発している点で上の2つとは異なっている。その意味でこの副詞は構成素副詞から文副詞へとステップを踏んで移行してきた典型的な例である。まず構成素副詞の内部で *faire voir évidemment* 「はっきりと(見させる)」から *prouver évidemment* 「明らかなかたちで(証明する)」への意味のずれ(抽象化)が起こり、次に *Evidemment, vous êtes dans l'erreur.* のような認識的モダリティを表す文副詞の用法が出てきている(いずれも『アカデミー辞典』(第7版)の例)。19世紀後半には、譲歩の文脈でもある程度の頻度で使われるようになる。その場合は、上で述べた *bien* を伴うこともある。今でも *évidemment* はこれらのどの意味でも使われる可能性があるが、構成素副詞としての用法は文学的あるいはやや古い用法になっている。

文法化の観点からは、具体的な意味内容をもつ表現から話し手の主観的な態度や判断を反映するモダリティ的な表現への転化(上の例では *évidemment* にみられた構成素副詞から狭義の文副詞への転化)、文レベルからテキスト(談話)レベルの表現への転化(上の例では *certes* にみられた断定を強める用法から譲歩の用法への転化)、といった傾向を、これらの例を通して具体的にみる事ができた(文法化の新しい考え方については山梨正明(1955)を参照)。

#### 4. まとめと展望

本稿では *certes*, *bien sûr*, *évidemment* という3つの認識的モダリティの副詞を取り上げ、それらがどの

ようにして譲歩の用法をもつまでに至ったかを見てきた。あとの2つは19世紀に入って大きな動きがあり、その結果、文副詞としての地位を固めたのであるが、そのあたりの動きを Discotext 1 の膨大なデータを通してかいま見ることができた。certes がいつ頃から譲歩の文脈で使われるようになったかは今回の調査ではつまびらかにできなかった。この点については今後の課題としたい。また apparemment, assurément, certainement, naturellement, peut-être, probablement, sans doute, sûrement, vraiment など他の認識的モダリティの副詞についても今回は触れることができなかった。これについても別の機会に譲りたい。

## 註

本稿は、1997年5月の日本ロマンス語学会第35回大会（金沢大学）で行った口頭発表に、会場での質疑およびその後の調査（特に Discotext 1 によるもの）の結果を踏まえて加筆・訂正したものである。席上、貴重なご意見を頂いた方々にこの場を借りてお礼申し上げる。なお、口頭発表の題目「意味変化—フランス語のいくつかの副詞」に今回「の場合」を付け加えたことを断っておく。

1) 語源については TLF, certes の語源欄参照。北仏、南仏を問わず各地の方言に様々な形で表れていることについては FEW, Band III, p. 610<sup>b</sup>3. 参照。

2) 以下、例文(1)～(6)の日本語訳を掲げておく。『フランス中世文学集1, 3』（白水社）所収の『聖アレクシス伝』、『歌物語 オーカッサンとニコレット』（いずれも神沢栄三訳）から該当箇所の訳文を拝借した。

(1) アレクシス殿 その地に降り立ちしは確かなこと

(2) かの聖器守 彫像の許に立ち戻り／「まこといづれの人を誹ねいだすべきかは知らず」／  
御像答えて「会堂の戸口に坐す者あり…」

(3) アレクシス殿 世人の己を崇むるを見るや／「真実はやこの地に止まるべきにあらず」  
かかる崇敬的となり 信心の障りとならんも心憂し

(4) われ年来 かの者に接しいたりしが／見咎むるべきこと さらになかりき／  
かの者こそ 神の人と心得て候う

(5) 貧しき人びと 心を一つに叫びて／「かかる金銀に用はなし…」

(6) オーカッサンが申します。／「それがぎりぎり最後のお言葉でございますか」  
父が申します。／「神さまも照覧あれ、しかとそうじゃ」

オーカッサンが申します。／「まことに父上ほどの年輩の人が嘘をつかれるのを見るのは辛いこと  
でございます。…」

3) この用法は、17世紀には口頭表現からは消え、改まった表現になるが、その後再び口頭でも用いられるようになる。FEW, Band III, p. 612<sup>a</sup>, 註5 参照。

4) sûr の項に次のように出ている。Familièrement et par ellipse, Bien sûr. Cela est certain.

参考文献

- Combettes, B. (1995) : Approche diachronique des adverbiaux contextuels. pp.33-50, in *LINX* n° 32, Linguistique de l'énonciation. Approche diachronique.
- Grieve, J. (1996) : Dictionary of Contemporary French Connectors, London, New York, Routledge.
- Hopper, P. J. & Traugott, E. C. (1993) : Grammaticalization. Cambridge University Press.
- Morel, M.A. (1996) : La concession en français. Paris, Ophrys.
- Nølke, H. (1993) : Le regard du locuteur. Pour une linguistique des traces énonciatives. Paris, Editions Kimé.
- Rodriguez-Somolinos, A. (1995) : *Certes, voire*; l'évolution sémantique de deux marqueurs assertifs de l'ancien français. pp.51-76, in *LINX* n° 32, Linguistique de l'énonciation. Approche diachronique.
- 川口順二・阿部宏 (1996) : 「文法化」『フランス語学研究』第30号所収, 日本フランス語学会。
- 山梨正明 (1995) : 『認知文法論』, ひつじ書房。